

【 国語科 】

育成したい「思考力」

- a 論理的思考力**：対象と言葉、言葉と言葉の関係について、言葉の意味、働き、使い方等に着目して、既成の秩序の中でそれらの整合性を吟味する力
- b 想像力**：対象と言葉、言葉と言葉の関係について、言葉の意味、働き、使い方等に着目して、五感を通して得てきた知識や経験と結んで自分の考えを創造する力
- c 言語感覚**：言葉の使い方の正誤、適否、美醜等について、直感的に判断したり、感覚的に捉えたりする力

「a論理的思考力」「b想像力」「c言語感覚」の3つにおいて、それぞれ、さらに3つの力に分類できると考えた。以下にその例を挙げながら述べる。

a 論理的思考力

● 言葉の整合性を吟味する力

『もうどう犬の訓練』（東京書籍、『新しい国語』3下）では、「『いっしょに町を歩く練習をします』と、1か所だけ『練習』という言葉が使われているが、これは訓練ではないのか」「練習という言葉には、訓練とは違った意味があるのか」のように、一緒に町を歩くという対象と、「練習」や「訓練」という言葉の関係について、その言葉のもつ意味に着目し、その範囲に照らし合わせながら、言葉の整合性を吟味する思考である。

● 順序や主張と根拠の整合性等、叙述相互の整合性を吟味する力

「根拠として何を挙げればよいか」「事例としてふさわしいものは何か」等のように、それぞれに考えられる言葉と言葉の関係について、根拠や事例等という言葉の働きに着目して、内容を吟味する思考である。

● 言葉の使用者の意図を捉え、その整合性を吟味する力

『森林のおくりもの』（東京書籍、『新しい国語』5）には、木が長生きであることを述べている部分がある。それは「筆者は、読み手のよく知っている例を挙げて、読み手の納得を得ようとしている」等、読み手という対象と例示された言葉の関係について、使い方に着目して、筆者の意図を吟味する思考である。

次に載せるのは、「論理的思考力」（言葉の使用者の意図を捉え、その整合性を吟味する力）の実践例である。

第4学年「文章のつながりを考えて読もう - 『ゆめのロボット』を作る -」

【本単元で育成したい「思考力」】

筆者のロボット作りに対する願いや考えと、活用例とのつながりを基に、叙述相互の整合性を吟味する力

本実践では、自分の考えたゆめのロボットについての提案書を作って紹介し合うために、教科書教材「『ゆめのロボット』を作る」から、筆者の説明文の書き方の工夫を捉えていった。子どもたちは、筆者が2つのゆめのロボットについて紹介している説明文を読み比べ、活用例の数や説明の文章の量等が異なっていることに疑問をもった。さらに既習の知識から、活用例の順序には、何か筆者の意図があるはずだと考えた。そこで、子どもたちは、筆者のインタビュー記事と説明文とをつなぎながらその疑問について話し合い、筆者は「自分の願いや考えを読み手に分かりやすく伝えるために活用例の書き方を工夫している」ということに気付いていったのである。



【書き方の違いについて話し合う】

b 想像力

● 一語・一文を知識や経験とつなぎながら自分の考えを創造する力

『かさこじぞう』（東京書籍、『新しい国語』2下）に「じいさまは、ぬれて つめたい じぞうさまのかたやら せなやらを なでました」という叙述がある。その一文から「じぞうさまは石でできているから、さわると、きっと氷のように冷たいよ。ぼくは、『こんなにつめたくなってつらからうにのう』と、じいさまがじぞうさまを思う気持ちを考えたよ」等と、石でできた地藏という対象と冷たいという言葉との関係を、その言葉の意味に着目し、自分の知識や経験とつないで捉え、人物の気持ちを思い描く思考である。

● 類似している言葉や対比的な言葉の関係を讀んだり、文脈と言葉の関係を捉えたりしながら、自分の考えを創造する力

『注文の多い料理店』（東京書籍、『新しい国語』5）には、「金文字→黄色な字→赤い字」のように色が象徴的に用いられている。これらの言葉と言葉の関係を、その言葉の意味に着目して、自分なりに解釈したり、紳士の心情の変化と重ねて捉えたりする思考である。

● 叙述を根拠に書き手・話し手の意図等をつかみ、自分の考えを創造する力

説明文においては、筆者の主張を捉えた上で、筆者の主張等の対象と述べられている言葉との関係を、その言葉の使い方に着目し、関連する本や文章から得た知識と結んだり、自分の経験と関わらせたりしながら、自分の考えを創り上げていく思考である。

c 言語感覚

● 言葉の使い方の正誤について判断する力

語の使い方や文の組み立て方について、言語規範に合っているか否かを直感的に判断することである。

● 言葉の使い方の適否について判断する力

物事を適切に言い表しているか、場や相手にふさわしい表現か等、表現の妥当性や効果を直感的に判断することである。

● 言葉の使い方の美醜等について判断したり捉えたりする力

美しい・汚い、明るい・暗い、固い・柔らかい、重い・軽い等、あるいは軽快、重厚、優美、勇壮等、表現の微妙なニュアンスを直感的に判断したり、感覚的に捉えたりすることである。

次に載せるのは、「言語感覚」（美醜等）の実践例である。

第1学年「ことばあそびうたカードを作って紹介しよう」

【本単元で育成したい「思考力」】

「ことばあそびうた作り」において、音や様子を表すことばをさまざまな言葉に変えることによって生じるニュアンスの違いを感覚的に感じ取る力

本実践では、自分が決めた「楽器」等の題材から、「太鼓」や「笛」等の、ことばあそびうたカードに表したい具体物を決めていった。そして、その音や様子を表す言葉を考えて。

その際に、例えば「太鼓の音はドンドンやボンボンがあるよ。ドンドンは大きい感じがしてボンボンは重い感じがするね」等と、2つの表現を比較してニュアンスの違いを感じ取る力が「美醜等を捉える言語感覚」である。



【言葉のニュアンスを伝え合う】